

《多世代交流による新しい支え合いのしくみづくり》
協議の場 第3回

日時 H23.12.13 (火) 9:00~14:00

会場 半田市岩滑 りんりん茶屋

【参加者】

水野尚美 NPO 法人共育ネットはんだ 代表
岩田 淳 NPO 法人こころとまなびどっとこむ 理事
下村裕子 NPO 法人りんりん 理事
鈴木隆仁 知多メディアネットワーク(株)コンテンツ部
石井久子 知多市南粕谷コミュニティ 会長
柘内勝利 愛知県教育委員会知多教育事務所 指導課 社会教育主事
伊藤弘憲 愛知県県民生活部 社会活動推進課 課長補佐 (青少年グループ)
坂井明彦 愛知県健康福祉部医療福祉計画課 主任主査
畑中聡子 半田市福祉部地域福祉課 主事
前山憲一 社会福祉法人半田市社会福祉協議会まちづくり課 課長
青山 誠 社会福祉法人愛光園 障がい者就職トレーニングセンター センター長
瀬瀬 晃 半田市子育て支援課 子ども育成担当
落合佑哉 NPO 法人エンド・ゴール

【事務局】地域福祉サポートちた 岡本一美 市野めぐみ 江ノ上愛 上杉有美 (愛知県インターン)
(以下、略称)

※南部コース車中で

1. あいさつと資料説明

岡本：ロードマップ案の説明

- ・ロードマップ案の内容は、まだ合意を得たわけではないが、こういう形でひとまず出した。中身は今後意見をもらっていく予定。

石井：南粕谷小だよりの説明

- ・南粕谷地区の取組みは、地域の人が小学校を支えていこうというもの。
- ・ボランティアのメンバーはいるが、学校とのタイミングが合わない。学校側からのボランティアの要請が急に入るため、コーディネーターが予定を立てにくい。
- ・学校の要望と地域の活動がミスマッチである。例えば、英語の授業の指導においては、ボランティアを考えている人が事前に外国人が教えているのを見ると、外国人の先生と同じようにできる自信がない。1~4年生間ではボランティアでできそうだが、5、6年生についてはボランティアではなく、専門的に勉強している人に教わったほうが良いとの意見がある。
- ・お金が払える状態なら地域外にも講師探しを広げられるが今の状況では難しい。

- ・南粕谷では地域と学校をつなぐ機関があるが、他の地域ではなかなかない。

2. 前回のふりかえりと協働ロードマップ案の提案と本日の目的

- ・本日は前回事例報告を受けたおっかわハウスの見学に行く。
- ・ロードマップ案の共生型居場所の定義づけと実践、取り組みの方向性考える。

3. おっかわハウス見学

- ・おっかわハウスでは、共生型福祉施設として、半田市社協やボランティアによって多世代交流のサロン、障害者の宿泊訓練や、手をつなぐ育成会による子育てサロン、NPO 法人菜の花によって放課後児童クラブの活動が行われている。また、外では精神障害のある人が作った野菜販売もおこなっている。
- ・サロンのスタッフは、社協職員、ボランティアの他に、日本赤十字の半田支部乙川分団有志が集まりおっかわ軍団という団体で手伝っていたり、障害がある人が手伝いに来たりもする。
- ・サロンでは常駐者 1, 2 名、学童保育では 3~5 名で行っている。
- ・月 1 回以上、半田市社協と NPO 法人菜の花とで定例の打ち合わせをし、情報交換を行っている。
- ・おっかわハウスでは中学校と協力関係を持ち、中学校から駐車場を貸してもらっている。今のところ、大きな行事がないときは中学校のところに縦列駐車をさせてもらっているが、使えなくなったときのために、地域の中で学校以外でも駐車できる場所をさがしている。
- ・地元の信用金庫各支店に開所式の駐車場借用を依頼したところ、地域貢献という事で駐車場貸しを受入れてくれた。
- ・ご飯が必要なときは、商店街から出前を取る等、福祉サービスとしての配食サービスを使わず、地域とつながるアプローチも行っている。
- ・社協と学校との関係は、今までの福祉の枠を取っ払い協働している。
- ・学校と社協の協働のベースとして関係がよい、ということがある。おっかわハウス設立前の説明の頃から学校とパイプができています。
- ・地域で拠点をつくるにはもともと住んでいる人と付き合っていくことが大切で、場所を貸してくれた家主が地域の人と良い関係を持っていたことも重要。
- ・今後、困難な事例でなければ解決できる場、地域の人々の生活訓練施設、福祉相談員として専門家ではなくボランティアの人が気軽に相談に乗る相談窓口としての機能ができればよい。・場所の設立にはお金と人の問題があるが、このような場所を各中学校区に 1 つが目標。
- ・障がい者の生活訓練の場としては、金銭を取るのではなく、ファンドのような形で次利用する人たちへ積み立てていってもらおうことを考えている。
- ・社協は地域を応援させていただき、黒子のような立ち位置。
- ・教育、環境、企業との付き合い。企業の中には、地域貢献として協力してくれる企業もある。
- ・はんだまちづくりひろばを運営することで、活動分野を福祉に限らず多分野の市民活動へ足を広げることで、社協への理解も広がる。
- ・学童のほうでは、NPO 法人菜の花が来年度子どものまちづくりについて進めていく予定。

4. おっかわハウス見学後のふりかえり

- ・学校との連携については、名古屋や尾張旭は南粕谷のようにきめ細かくなく、都市部では難しい。
- ・場所を作る前から、地域の付き合いを大切にし、昔から住んでいる人を巻き込んでやるスタンスはよい。
- ・こうあるべきだという姿勢で事業を進めても、地域の人にはなかなか通用しない。

5. りんりん茶屋で

- ・「おやこでランチ」：月に1回、小さな子どもをもつ親が子どもが遊んでいてもゆっくり食べられる機会を作った。
- ・「生き活きサロン（おでかけサロン）」：料理の得意な人が料理をつくり、近所の人に食べてもらおうという事業。岩滑地区では今年初めて日本生命財団からの補助金を使って、安全見守り実験を始める。半田市社協とりんりんとで地区に住む人の日常の見守り、災害時の見守りを行う。これは、援護者の人と要援護者の人に食事券を出すことで、そろってりんりに来てもらい、日頃から顔見知りになることを目的とする実験。
- ・認定 NPO 法人の要件が緩和されたというが、国税局への相談で厳しいことを言われた NPO 法人があった。認めないための厳しさではなく、背中を押してもらえる支援が必要。来年度から県が窓口になるので配慮願いたい。
- ・行政と市民お互いの協働作業は進み始めたばかりだ。

6. 現場見学報告

（北部：ネットワーク大府）

- ・地域との関わり（民生委員、婦人会役員、PTA）から女性の活用を教育委員会へもっていき福祉団体を設立する。助け合い、介護事業、病児・病後児、放課後児童クラブを行っている。24年度からは、社会福祉法人格で特養をオープンし、1階の共用設備には地域交流を目的とした喫茶を併設し、障がい者雇用をすすめ就労支援の機会をつくってる。
- ・平成19年にはキッズクラブ（放課後クラブ）設立する。赤字だが要望があり続けている。
- ・空き教室の使用の旨を教育委員会に直に進言するのではなく、生涯学習課を窓口で学校教育課との連携を組み、教育長への提案の機会に働きかける。
- ・地域をより知る2つの「つなぐ人」が必要（①「個人の意識」と「個人の意識を共有化する人」をつなぐ人、②「実行する人」と「既存組織」をつなぐ人）。
- ・学校と NPO が同じ方向を向いているのに進めないのはなぜか？学校と NPO は子どもをともに育てるために、教育新人研修を NPO 法人で行うとよいのでは？
- ・地域が家庭の代わりもすることで子どもや若者も社会を支える一員となり、超高齢社会を支えることにつながる。そのためにはタテ割を打破していかなければならない。

（南部：おっかわハウス）

- ・おっかわハウスでは社協職員の思いが強い。地域の人とうまく連携している。
- ・事業が家主の思いに沿っている。家主は地域の信頼を得ている人というのもポイントである。
- ・乙川中学校と社協との関係は、学校は社協に駐車場を貸し、学校は生徒の体験活動を社協につないで

もらう方向で検討してくれている。

- ・ボランティア団体等、地域の協力者が集まってきている。福祉だけでなく地域の商業者など、福祉を越えて地域とつながっている。
- ・おっかわハウスの地域に根付いている姿は、古来からの日本のしきたり・お付き合い方法と重なる。

7. 共生型居場所とは？また拡充された際の地域の姿について意見交換

- ・超高齢化社会の中で、地域で心地よい思いをした子どもは高齢になってもよき高齢期を迎えるのではないか？

【ロードマップ案について意見交換】

■ 5 ページについて

- ・「共生型居場所」という定義が難しい。
- ・もう少し具体的な機能、目標を掲げたい→機能、目標をかつちり定義するのは窮屈になってしまい難しい。種類分けはどうか？ →類型化に意味があるのか？類型化する必要はないのではないか？
- ・異なる存在を認めあう事が必要。その地域によって必要とされるものが違い、共生の意味合いが違う。
- ・一人の人の生活を支えるためにサービスを選べるのがよい。いろんなものがあるのが大切。
- ・大体の共通項（コンセプト）を書きならべる方がよいのでは？
- ・福祉の相談窓口として、地域の中でハードルが低い居場所があるとよい。窓口のようなカウンターがある場所ではなくて、お茶やおしゃべりなどができる場で専門機関につなぐ機能があれば十分。

■ 6 ページ、3 - (1)

- ・もう少し具体的にしたいほうがよい。

■ 3 - (1) - ①

- ・機能的なものが欲しい。
- ・共生型居場所とはどのような場所を指すのか？共生型居場所といっても、おっかわハウスとネットワーク大府では異なる。

■ 3 - (1) - ②

- ・子どもも大人も社会の役割をもつことで、超高齢化社会が維持できるのでは？

■ 3 - (1) - ③

- ・「お互いを大切にできる地域」というのを付け加えるとよい。「お互い」の中には人だけでなく、環境とといったのち全般を含みたい。
- ・みんなで盛り上げていくことも大事なので、地域への愛着というのも盛り込む。

■ 3 - (2)

- ・取り組み課題の順序、柱はこれで良いか？→図形は三角形ではないほうがよい。
- ・三角か四角になるのか、図形は全体像がみえないと決められない。
- ・物事を進めるのは人であり、思いがあって行動へとなるので、図は上からみて同心円になるようにしたらよいのでは（「人」を円の中心として）？→図 1 参照
- ・図に、行政、NPO、市民の三者を入れたらどうか？全員が担い手となり、三者が同じ方向をみているイメージ→図 2 参照

- ・各主体の役割を見直す。学校と NPO 等なかなかつながれない主体同士のつながりをつくっていくにはどうしたらよいか？
- ・NPO 研修をできそうなところからやったらどうか？新人研修だけでなく、校長なども含んでできるとよい。
- ・居場所づくりの意見交換会があってもよいのでは？違う分野（福祉、教育など）の人同士の意見交換を行うことも意味があるのではないか。
- ・研修を広く呼びかけるが、教職員のみになり、NPO が入らない。研修をやったのでよい、で済まされてしまう。共有されたとするにはどうしたらよいか？→ネットワーク大府の人の言葉：“気づいた人”が多く分野で研修を組み込まなければいけない”。
- ・いろんな組織を作っても形骸化することがある。言葉は大切だが、言葉よりその人の行動を見なければいけない。そして具体的に力を合わせる必要がある。
- ・担い手以外にも必要な人はいないか？
- ・行政、企業は黒子として人を大切に、視点を外さない事が大切。地域の人と同じ方向を見ていく人となる必要がある。
- ・おっかわハウスの証券会社との協力関係の例のように、自ら壁を作らず大胆に働きかける。
- ・短期的ではなく、長期にわたり機能する仕組み作りをする。

7. ふりかえりと提案

- ・制度の隙間を埋める必要がある。
- ・地域づくりを支える強い思いが人を動かしている。
- ・こうあるべき、とするおしつけは拒否反応が大きい。みんなの思いを一つにすることが大切。
- ・次回の協議は、1月18日（水）9:30～知多市市民活動センターで行う。

